

荒川流域における漂着伝承

松本 芽生

河川整備が進むにつれ川は人々の生活から切り離されてきた。川と人の結びつきが薄れつつある今、各地でビオトープ整備が行われているように、川と人の結びつきが見直されようとしている。漂着伝承とは神仏等が海や川から流れ着いたという伝承で、かつての川と人の結びつきを伝えている。海の漂着伝承は川の漂着伝承に比べて数が多いため、その研究も数多くなされてきた。一方、川の漂着伝承に関する研究は少なく、漂着伝承を川と人の結びつきという観点で捉えた研究はなされていない。そこで、本研究では荒川流域における漂着伝承をとりあげ、民俗という観点から川と人の結びつきを再考する。

本研究の目的は、荒川流域における漂着伝承の傾向を見出すことと、漂着伝承を通じて川と流域で暮らす人々との関わりを考察し、川と人の結びつきを見直す一助とすることである。本研究では漂着伝承に加え、川から神仏等が引き揚げられたという水中出現も研究対象とした。文献調査により収集した伝承は79点で、うち64点は漂着伝承、15点は水中出現となった。これらの伝承を漂着物や流出の要因について分析した上で、川と人の関わりを考察するため、漂着物の扱い・漂着への関与・伝承が成立した背景という3つの視角から分析を行った。

漂着物の分析から、仏像、とりわけ観音菩薩像の漂着伝承が多いことがわかった。この背景には、秩父34観音霊場をはじめとする観音霊場の存在がある。また、関東地方においては利根川・荒川流域に獅子頭の漂着伝承が集中している。獅子頭の漂着伝承は、その多くが獅子舞の盛んな埼玉県に分布している。漂着物の扱いに着目すると、流れ着いた神仏等を祀ったという伝承が大半を占めている。人は漂着物の引き揚げだけでなく流出にも関与しており、人が流出・漂着に関わった事例の多くは流出地と漂着地が揃って判明している。これらの事例から、荒川流域には漂着物の移動距離が短い伝承が多いとわかった。このことから、流域の人々は例え川を流れた距離が短くとも、神仏等の漂着に神意を見出していたと考えられる。

以上のように、川と人の結びつきという観点から漂着伝承を分析した結果、流域の人々にとって川は神仏等を迎え入れる場所であると同時に、神仏等を流し去る場所でもあるとわかった。そして何より漂着伝承は水害と深く結びついていることから、漂着伝承を通じて流域の人々による水害の捉え方を考察することができる。人々は度重なる水害を経験するうちに、洪水によって流されるものがあれば、流れ着くものもあると考えた。このように、漂着伝承は水害との向き合い方を今に伝えている。

(指導教員 白井哲哉)